

# サマリー：日中戦争と中国民族資本の運命：江南セメント会社のケーススタディ

雑誌名	比較法文化：駿河台大学比較法研究所紀要
号	16
発行年	2007
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1307/00000396/">http://id.nii.ac.jp/1307/00000396/</a>

## 《サマリー》

### 日中戦争と中国民族資本の運命 —江南セメント会社のケーススタディー—

張 朔人

江南セメント会社は中国民族資本によって設立された中国重工業企業のひとつである。その設立準備から生産開始まで15年の長い年月を要したが、これは中国近代民族工業発展史上稀有のこととすることができる。その原因は主として日本の起こした対中国侵略戦争によるものであった。1937年11月工場は操業間近であった。上海の陥落によって戦争が首都南京地区までおしよせてきたため、工場は操業を停止せざるをえなくなった。南京陥落後日本側は絶えず「生産販売の協力」や「軍事管理」方式で江南セメント会社にセメント生産をはたらきかけた。江南セメント会社は棚上げ方式で局面の緩和を待ち、生存をはかった。

1943年日本軍側は、「大東亜戦争に協力する」ことを名目に江南セメント会社の機械を強制徴発し、北方の山東省張店へ運びアルミニウム生産に使おうとした。これに対し江南セメントは社をあげて抵抗した。汪精衛政権がさらに波乱を大きくしたため、江南セメント会社の厄運は逃れられないものとなった。抗戦勝利後江南セメント会社は改めて新しい機械を購入した。生産の希望は15年の苦難をへて、新中国誕生の後によりやく実現するはこびとなった。

この個別事例の研究を通じて、われわれは中国民族資本が特殊な時期において困難な生存状況にあったことを理解できよう。日中戦争期間中国民族資本の生存環境はきわめて厳しいものであった。日本による江南

セメント会社の財産掠奪は、会社の発展にとって致命的ダメージを与える作用をはたした。同時に江南セメント会社の発展史の分析を通じて、われわれは抗戦時期の中国民族資本発展の軌跡を明らかにすることができるのである。